

平成 30 年度 全国学力・学習状況調査の結果から (平成 30 年 4 月 17 日実施)

小諸市教育委員会

文部科学省では、次の目的で小学校第 6 学年、中学校第 3 学年、原則として全児童生徒を対象に「全国学力・学習状況調査」を毎年実施しています。

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

今年度は小学校の国語、算数、理科、中学校の国語、数学、理科で実施されました。国語と算数・数学では基礎知識を問う A 問題と、知識の活用力を問う B 問題からなっています。理科は、3 年に一度実施されます。

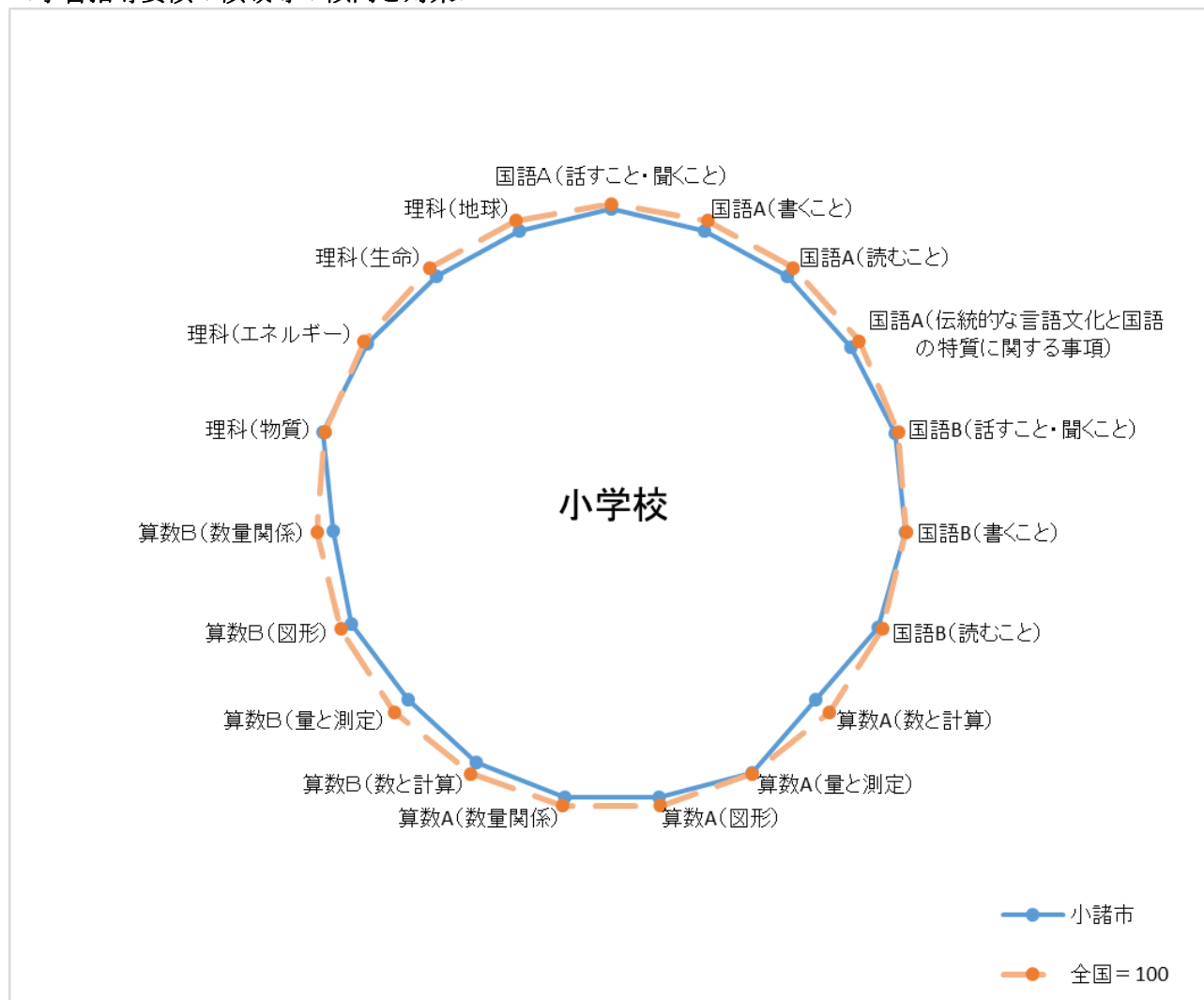
以下は、小諸市内小中学校の全体的な傾向ですので、どの学校にもそのまま当てはまるものではありませんが、各校が自校の課題や改善策をより明確化するための一助としています。

(1) 小諸市内小中学校の学習指導要領の領域等の平均正答率の状況

【小学校】＜国語、算数の A・B 問題と理科の全体的な傾向＞

- ・算数 A「数と計算」、算数 B「量と測定」の領域でやや下回りましたが、各教科の平均正答率は全国と比べて、国語、算数の、A・B 問題、理科ともすべてほぼ同じでした。

＜学習指導要領の領域等の傾向と対策＞



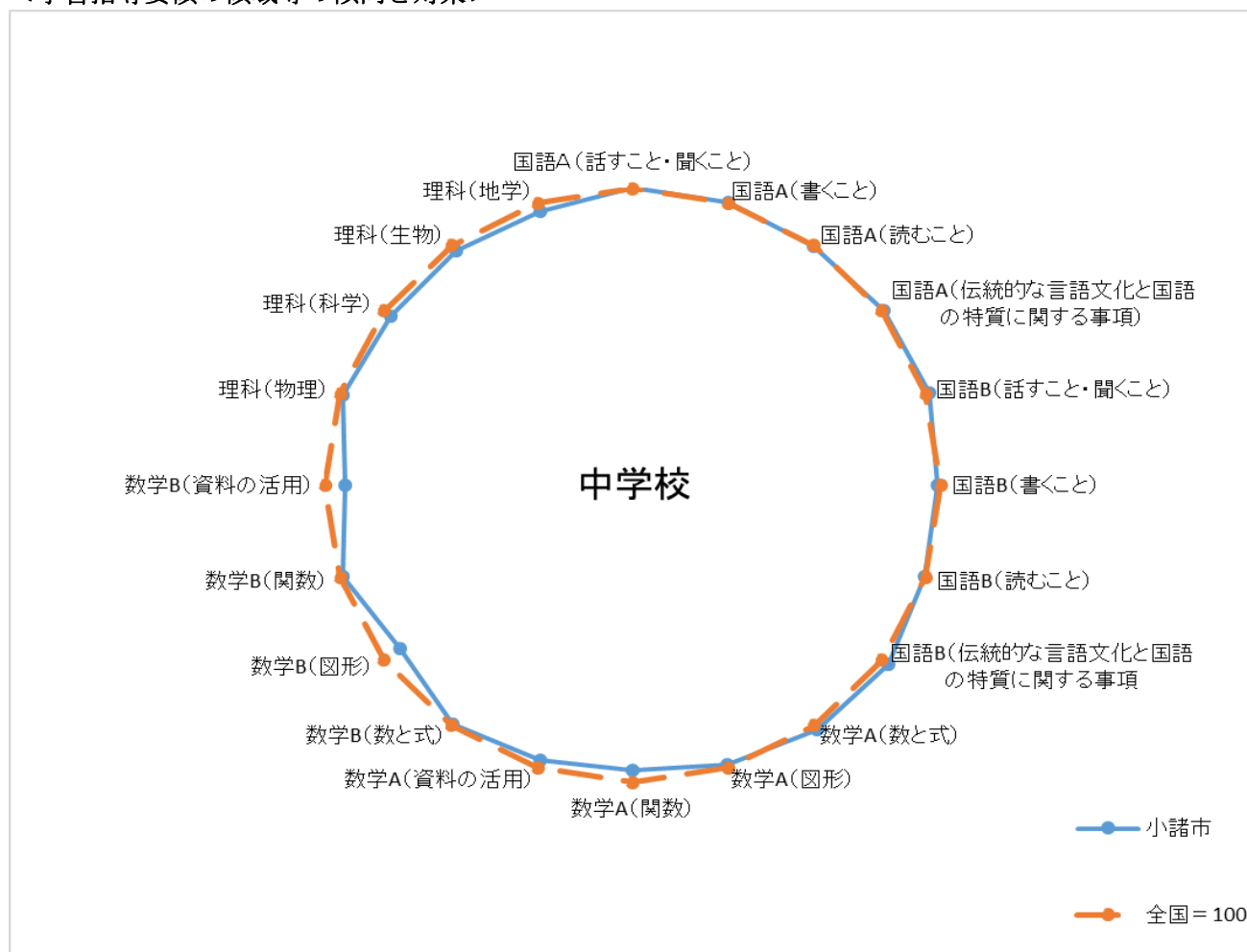
学習指導要領の領域等の平均正答率をみると、各教科のすべての領域でほぼ同じ値か、わずかに低い値を示しています。国語では、A問題のすべての領域で、全国の平均正答率をわずかながら低い値を示しています。このことから、基礎知識をしっかりと定着させるための日常的な学習活動が必要です。家庭学習が形式的になっていないか、自ら考え主体的に取り組む学習が授業で展開されているか等、児童の関心・意欲・態度を高めたいです。

算数でも同様なことが言えます。A問題は全国平均と比べてほぼ同じですが、B問題では、やや課題がありました。このことから、数学的な操作活動を通して数学的な見方・考え方の育成が必要になると考えられます。理科もほぼ同じですが、領域によりやや課題があります。

【中学校】＜国語、数学のA・B問題と理科の全体的な傾向＞

・数学Bの「図形」の領域でやや下回りましたが、各教科の平均正答率は全国と比べて、国語、数学のA・B問題、理科ともすべてがほぼ同じでした。

＜学習指導要領の領域等の傾向と対策＞



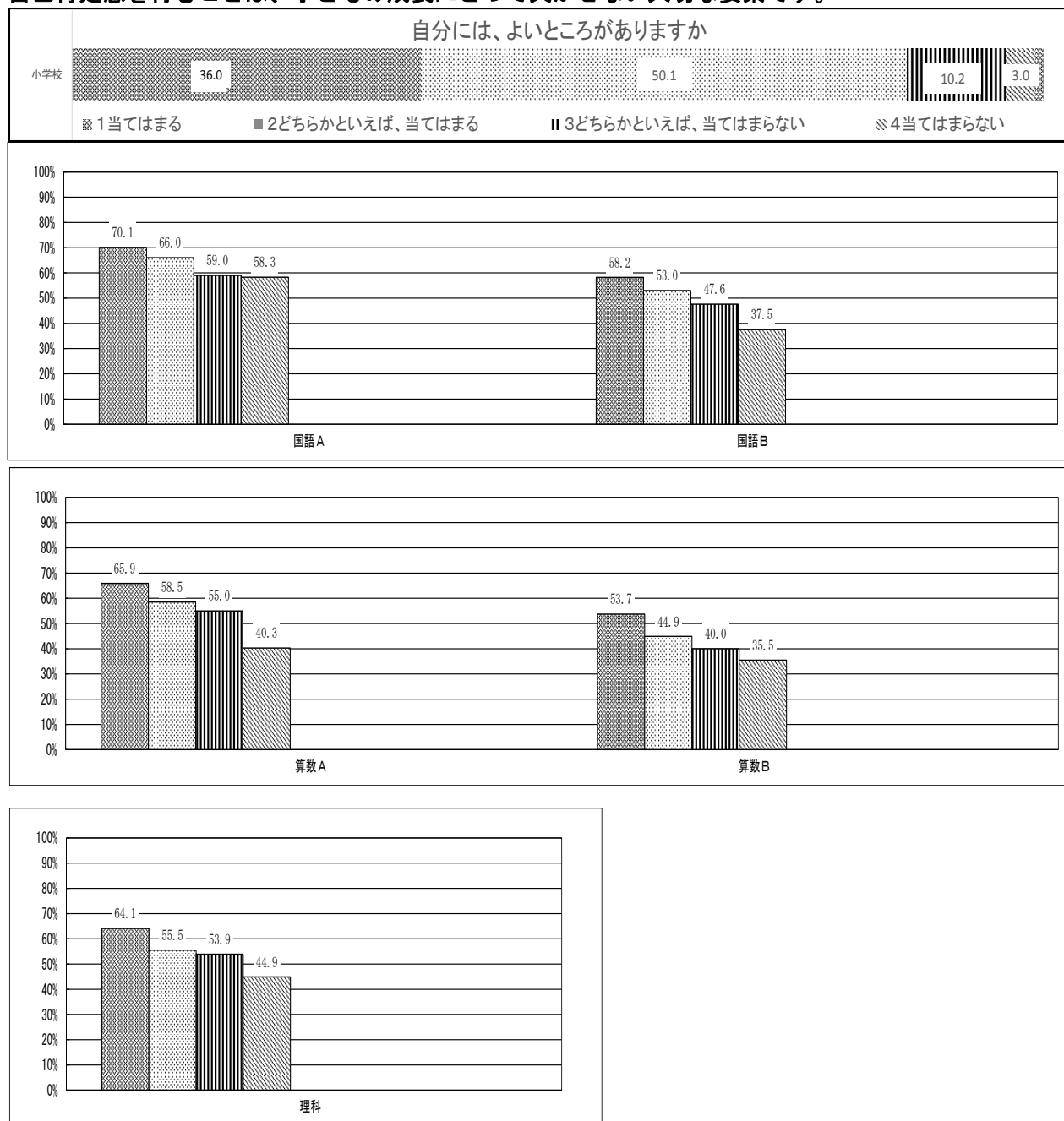
学習指導要領の領域等の平均正答率をみると、国語ではB問題の書くことを除いてほぼすべての領域で同じかわずかながら高い数値になっています。数学でもすべての領域でほぼ同じですが、関数、図形、資料の活用の領域で課題が見られます。

数学では、基礎的な一次関数の意味がしっかりと定着しているか、また、B問題のように「証明、文章や図、グラフなどから問題設定を理解して、示された課題を解決することに抵抗がある」「どの知識を活用するか判断に迷う」といったことが考えられます。このように、数学的な見方や考え方、数学的な技能を高めるには、実生活における問題の解決に数学を活用できるようにすることが大切だと思います。

理科では、ほぼすべての領域で全国平均に近い数値になっています。

（２）クロス集計の状況（児童生徒の生活の様子と平均正答率の関係）

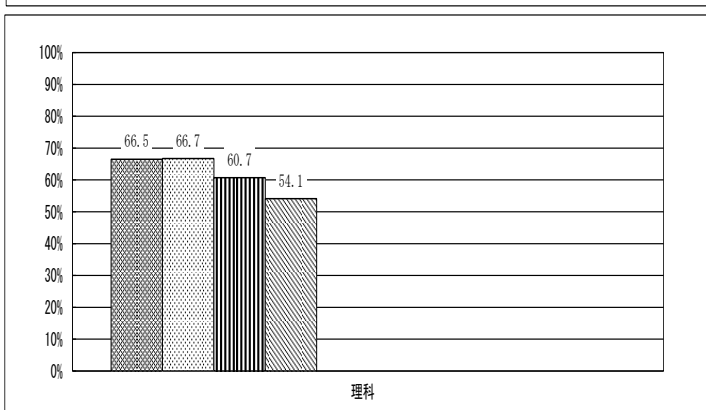
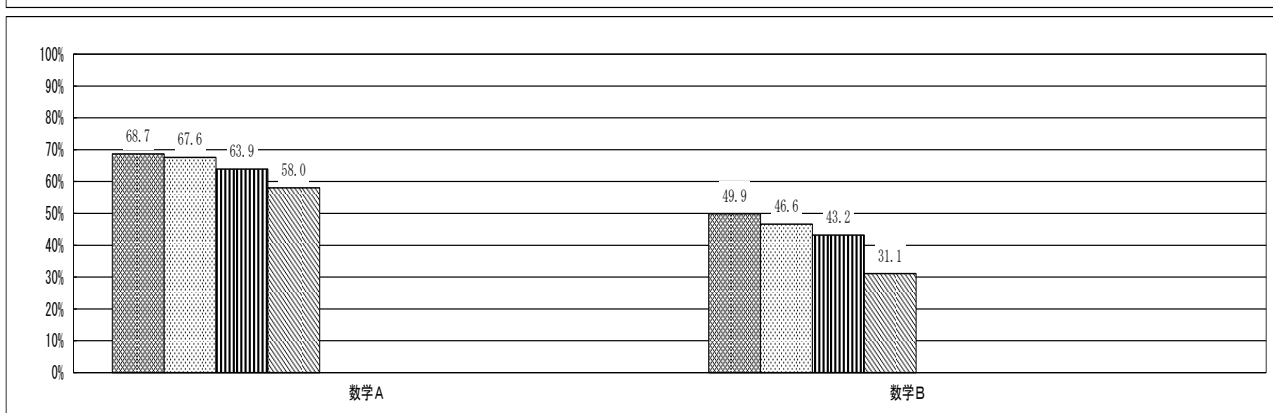
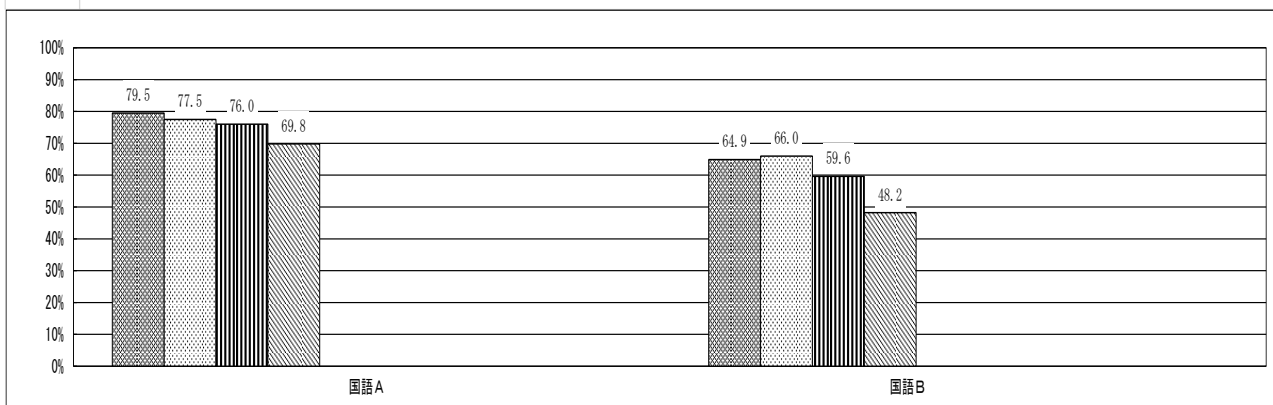
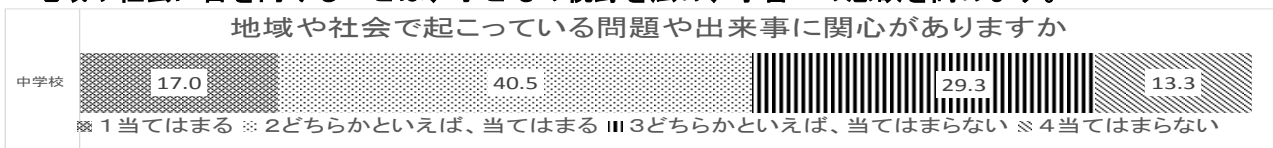
* 自己肯定感を育むことは、子どもの成長にとって欠かせない大切な要素です。



クロス集計は、児童生徒質問紙と学力の相関関係が見られるかを分析したものです。上記の棒グラフのように「自分には、よいところがありますか」の質問に対して、「1 当てはまる」「2 どちらかといえば、当てはまる」と答えた児童の平均正答率は、どの教科も高い傾向を示しています。このことは、中学校でも同じ傾向がみられます。学力の向上や定着、ひいては子どもの成長にとって自己肯定感を育むことは、大切な要素です。「自分でイイかも・・・!」「やった! できた!」など、大人は子どもの心に火をつける声掛けや場面を工夫する必要があります。

しかし、上の帯グラフを見てください。「1 当てはまる」と応えた小諸市の小学生は 36.0%（中学生は 25.9%）でした。これに対して、全国は 41.3%（中学生は 33.8%）でした。どのようなかわり方をすれば子どもの自己肯定感が高まるのか、学校や家庭、地域で更に考えていく必要があります。

*** 地域や社会に目を向けることは、子どもの視野を広め、学習への意欲を高めます。**



「地域や社会で起きている問題や出来事に関心がありますか」という質問に対して、「1 当てはまる」「2 どちらかといえば、当てはまる」と答えた小諸市の中学生は、57.5%（小学生は58.2%）でした。全国は、59.6%（小学生は63.9%）で、小学生はやや低いものの、中学生はほぼ同じでした。

下の棒グラフでは、「1」「2」を選択した生徒の平均正答率が高い傾向を示しています。ここで、国語と数学のA問題とB問題の差に注目してください。国語Aでは、「1」と「4」の平均正答率の差は、9.7です。B問題では16.7です。同じように数学では、A問題の10.7に対して、B問題は18.8です。これは、全国でも同じ傾向を示しています。B問題は主として「活用」に関する問題です。地域や社会で起きている問題や出来事について、「自分なりの考えをもつ」ことで視野が広がり、学習への意欲も高まるのではないのでしょうか。

（３）全国学力・学習状況調査「保護者に対する調査」から

昨年度（平成 29 年度）の全国学力・学習状況調査では「保護者に対する調査」が実施されました。その分析結果が本年度 6 月に公表されました。

「保護者に対する調査」主な質問は以下の項目です。

- 子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている
- 子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている
- 毎日子どもに朝食を食べさせている
- テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲームも含む）で遊ぶ時間を限定している
- 携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている
- 子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている
- 子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている

など

これらの保護者への質問とその保護者の子どもの学力をクロス集計して、相関関係が見られるのかを分析しています。

（＊注：クロス集計は因果関係を示すものではありません。「A であれば B である」ということではありません。）

公表された分析結果の中の＜家庭環境と子どもの学力＞に次のような記述があります。

● 以下の場合に、子どもの学力が高い傾向にある。

＜保護者の働きかけ＞

- ☐ 学校の出来事、友達のこと、勉強や成績のこと、将来や進路、地域や社会の出来事やニュース等、会話が深い。
- ☐ テレビ・ビデオ・DVD を見たり、聞いたりする時間などのルールを決めている。
- ☐ 子どもに努力することの大切さを伝えている。
- ☐ 子どもに最後までやり抜くことの大切さを伝えている。

＜保護者の教育意識や諸活動への参加＞

- ☐ 将来、子どもに留学してほしいと思っている。
- ☐ 自分の考えをしっかりと伝えられるようになることを重視している。
- ☐ 地域や社会に貢献するなど人の役に立つ人間になることを重視している。
- ☐ 保護者自身が PTA 活動や保護者会などへ参加している。

親の子どもへの働きかけ方や親としての心構えの在り方を考える上で、参考になるのではないでしょう

か。
なお、調査結果については、国立教育政策研究所のホームページに掲載されていますので、適宜ご参照ください。

[Http://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/kannren_chousa/hogosya_chousa.html](http://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/kannren_chousa/hogosya_chousa.html)

全国学力・学習状況調査の結果は年度によって多少の違いがあります。年度によって、子ども達の実態や状況に違いがあるからです。しかし、具体的に示された数値は真摯に受け止め、学校での授業改善や地域社会での子ども達への支援の在り方に生かしていきたいと考えています。

なお、形式は違いますが、各小・中学校からも学校ごとの結果をお知らせいたしますので、参考にしてください。